

平成22年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立中里小学校 教諭 原 朋子

- 1 派遣期日 平成22年8月9日(月)
- 2 研修先 会場 日比谷公会堂
所在地 東京都千代田区日比谷公園1-3
- 3 研修内容 第73回国語教育全国大会

豊かで確かなことばの力をはぐくむ国語教育の創造
一学び手の言語生活が充実する単元学習の展開一

(1) 提案授業

○第3学年・国語 指導者 筑波大学附属小学校 青木 伸生 先生

○単元名 「とんぼ図かん」をつくろう

○本時の展開

①「とんぼのめがね」を読み、書かれている内容を確認する。

②「赤とんぼ」を読み「とんぼのめがね」との共通点や相違点について考える。

③それぞれの作品を絵に表すとしたら、どのような絵になるかを考える。

○児童は「とんぼのめがね」「赤とんぼ」詩を読んだ後、二つの詩を比べ共通点と相違点を探した。教師は児童のつぶやきを拾い、考えた理由を言わせていた。また、児童の答えから既習の内容について確認を行うことで、確実に定着させていた。

「赤とんぼ」では、おわれてを赤とんぼが追いかけられたと誤解している児童がいた。「見たのは誰」と発問することでおわれては、背負われてという意味だと児童が理解した。もう1つねえやは誰かを考えるところで、作者のお姉さん、お母さんの代わりをしている人、ベビーシッターなどと様々な意見が出された。教師は詩の言葉や構成などに注目させながら正解に近づけていった。児童は一生懸命言葉を手がかりにして考えていた。

最後に、とんぼが出てくる詩、短歌、俳句、ことわざ、慣用句の中から自分が気に入った作品を選び、内容や雰囲気合った絵を加えたものを児童が発表した。どの児童も、はっきり理由を述べ発表が楽しい、やりたくて仕方がないというような様子だった。

(2) 提案・シンポジウム

テーマ「学び手の言語生活充実のための工夫―身近な素材を単元にどう生かすか―」

東京成徳短期大学 寺田 清美先生 一乳幼児期における言葉の出会いと獲得一

○ i 子どもは、ヒトとして生まれ、人間として育とうとする。その一人ひとは、絶え間なく果敢に生きようとする。 ii 「生への欲求」はさまざまに態様を変える。しかし、基本的には生涯にわたって続けられる。 iii 生きることへの積極的なエネルギーは「愛着(アタッチメント)の形成」により育まれていく。

○子どももトンボも命あるもののエネルギーは共通である。このエネルギー命との関連性を気付いていけるように保育者は配慮したい。

○言葉や文字の習得は、「話す・聞く」を中心に、読みたくなる書きたくなる環境を整える。乳幼児期にはまず言葉のおもしろさに気付き、言葉のリズムを楽しみながら語彙を豊かにしていく。

○乳幼児から学びをする大切さ

関心・意欲(楽しみに) ①人の話を聞いてみる。②自分も考えてみる。③言葉で表し、

発表する。

筑波大付属小学校 青木 伸生先生 事実・体験と言葉をつなぐ

○とんぼに関する知識がふえても仕方ない。付けるべきは言葉の力。「とんぼ」を核に単元学習を構想すると、説明的文章と文学的文章といったジャンルを超えて学習材が集められ、読む、書く、話す、聞くの学習が総合的に組織できる。やごを実際に飼育できればさらに効果的である。

○言語生活の充実には継続性が大切である。(行きつ、戻りつする。) こういう力を付けたいという思いがあり、この言語活動をさせたいというように繋がる。

○時代背景や作者のバックボーンについて、大人が持っている解釈を教えるのではなく、子どもがおよそつかめればよい。言葉を手がかりに読んでみる。そして自分なりに考えることが大切。

東京都港区立赤坂中 甲斐利恵子先生 「身近な素材」単元の困難点

○身近な素材に何か意味がプラスされなければ、台無しである。子どもたちの興味・関心に即した学習材ではなく、興味・関心をは向いてほしい学習材を用意する。単元に入る前に子どもたちの身近な存在になっているとよい。

○今日の学習のねらいは、赤とんぼの読解ではない。どこまで語彙を理解させ、どこまで情景を想像させるかを押さえておかなければならない。作品に描かれている情景と子どもたちの描いた風景にはギャップがある。目標は何か、つけたい力と活動を離してはいけない。

東京学芸大学付属高校 佐久間俊輔 結節期に着目した言語活動のあり方

区分	I					II			III			
学年	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3
操作段階	具体的操作 (体験的段階)		具体的操作 (体験的段階) ↓ 抽象的操作 (知識的段階)			抽象的操作 (知識的段階)			抽象的操作 (知識的段階) ↓ 機能的操作 (専門的段階)		機能的操作 (専門的段階)	

○「小・中・高一貫プログラム」での研究を行った際、発達段階に応じてモデルを想定した。現行の12学年を3つに区分し、さらにIとIIIについてそれぞれ二分する5段階モデルである。

抽象的操作：「ことばによる分析と構造の力」を育む。

機能的操作：「ことばによる総合と批評の力」を育む。

○単元のゴールは、活動を繰り返すことで力が付いてくるのではないかと考える。一つの単元だけで力が付いたかどうかゴールとすることはできない。

4 感想

教師は児童のつぶやきや発表をととても大切にし、意見についてどう思うかと他の児童とともに練り上げていた。必要などころでの発問や切り返しをするには、教材研究が重要であることを改めて実感した。授業でどんな力を付けたいのか、そのためにどんな活動をするのかをしっかりとっていないと、授業が収束しなかったり、「活動あって力なし」の状態に陥ってしまったりする。つけたい力をしっかり意識して授業づくりをしていかなければならないと思った。

また、幼児期から、小学校、中学校、高校へと発達段階をとらえて身に付けさせなければならぬ力をしっかり小学校で付け、中学校、高校へとつなげていかなければならないと思った。